人口問題研究（J. of Population Problems）66－2（2010.6）pp.76～80

特　別　寄　稿

黒田人口学の回顧と展望

清　水　浩　昭

はじめに

黒田俊夫は，人口と社会保障に関する研究を出発点にして，その後，出生，死亡，移動，年齢構造，家族等々多領域に渡る研究を展開してきた．この黒田が展開してきた人口学を「黒田人口学」と称するとすれば，黒田が展開した人口学は，一体，どのような特徴を有しているのであろうか．私は，その特徴を次のように要約できると考えている．

①人口学することの学問的，社会的意義と人口学の効用を明示したこと．

②研究方法は，国際的な研究動向を把握し，こうした研究動向を踏まえて研究を展開し，得られた知見に基づいて理論構築を行い，その理論に基づいて政策提言を行ったこと．

③人口転換論を主要な研究テーマとして多様な領域における転換状況を探求し，多くの研究成果を提示してきたこと．この多様な研究領域と研究成果は，人口転換論に収斂することを目指したこと．

④逸速く転換状況の把握を目指したのは，それが，それぞれの転換に対応した政策策定に寄与することになり，強いては人間福祉の増大に寄与すると考えたこと．

⑤人口転換論は，経済的・社会的秩序の変化に対応していると考えたこと．

⑥しかし，晩年になると，この人口転換論に文化的秩序の変化を取り込む必要性を感じていたこと．

小稿では，このような要約に基づいて，黒田人口学の根底にある人口学思想とこの思想に導かれて展開された人口学的研究の営為（転換論の追究）に問題を限定して議論することにした．

１．人口学とは－研究対象と方法

黒田は，人口学が有する学問的特徴やその効用，追究したい課題について，どのような考えをもっていたのであろうか．ここでは，このような点を解き明かすことからはじめることにした．黒田にとって，人口学は，何を研究対象にし，どのような資料や方法に基づいて研究を展開する学問であると考えていたのか．さらに，人口学を通じて解こうとしていた課題は何か，その課題を解くことの意味をどのように考えていたのか．ここでは，このような点についての考えを，黒田の論考から引き出すことにした．

黒田は，人口学を「出生，死亡とその差の変化を通じて生じる人口再生産という量の変

動と年齢構造における質的変動を狭義の主要な研究対象としているが，さらに他方において人口移動という人口の再生産や年齢構造に直接影響をもたらす社会動態をも研究対象としている．出生，死亡，移動は人口研究における三大基本的要素であるといってよい．ところで，人口学はこれら三大要素の変化の研究がすべてではない．もう一つ残された重大な課題がある．それは，これらの三大人口要素と社会経済との相互関係についての研究領域である」（黒田1978：p.149）としている．

黒田は，このように人口動態，社会動態，人口静態を主要な研究対象とする学問が人口学であるとするとともに，この主要な研究対象と社会経済との相互関係を研究する学問であるとした．その研究方法は，既存の統計資料や調査資料を用いて人口分析（人口変数自体の分析と人口変数間の分析）と人口研究（人口変数と社会・経済的条件との相互関係の分析）の二つの手法に基づいて人口現象の分析を試みることを基本にしながら，自ら収集した統計資料や既存の調査資料を用いて分析を試みたところに特徴がある．さらに，黒田は，まず，国際的な研究動向を把握し，このことを踏まえてアジア・日本社会等の分析を試み，そこから析出された分析結果に基づいて政策提言を行うという順序で研究を進めてきた．ここに，もう一つの特徴がある．

２．「人口学すること」の意味 ―学問的性格とその効用－

次に，黒田は「人口学すること」に，どのような意義があると考えていたのか．ここでは黒田が考えていた人口学の学問的性格とその効用に問題を限定して，黒田の考え方を紹介することにしたい．

(1) 人口学の学問的性格

「今日の人口学は，人口現象研究の科学として補助科学，技術科学としての性格を著しく強めるに至っている．と同時に境域科学として諸他の関連科学を基礎とする総合科学的性格も濃厚になってきた．人口現象の中枢をなしているものが，出生，死亡，移動といった人口動態現象や，人口数やその構造に関する人口静態現象であり，その変動や要因を研究するものである以上，社会学，経済学，地理学といった社会科学のみならず，医学，公衆衛生，遺伝学，生物学，人類学といった自然科学とも不可分の関係にあることはよういに理解できる」（黒田1960：p.13）とし，さらに，「人口学の一つの重要な特質は，それが独自の科学であることを主張することよりも，むしろ他の関連科学に基礎をおきながらかつ関連科学の発展や公私の諸政策樹立の補助的，技術的科学として貢献するということにある」（黒田1960：p.16）と述べている．また，「人口学は警報の科学であり予報の科学であるといわれている．人口問題についての一般の関心を高め，政策担当者に行動への決意を促進せしめることに成功をした人口学はその任務を果たしたということもできよう」(黒田1976：p.１）とも述べている．

(2) 人口学の効用

それでは,「人口学がどのような役割, 貢献を果たし得るものであるかを多少とも具体的にのべてみよう. ……人口学の効用は, 政策に対する貢献と他の科学に対するそれとに分けられる」(黒田1960：pp.16-17) とし, その効用として人口推計, 労働力生命表, 結婚表等を挙げて中央, 地方政府の経済政策や民間企業に対する貢献度について言及している. このことを踏まえて「一般的にいうならば, 社会, 経済の発展計画の基礎的素材を提供して公共ならびに民間の諸政策に直接貢献しうるのみならず, このような人口学の役割から関連科学の進歩に及ぼす役割も無視してはならないであろう」(黒田1960:p.20) と述べている. 黒田は, このように人口学の一般的な学問的性格と人口学の効用について論じた上で, 一体何を, 人口学の課題としたのであろうか.

それは, 一言で要約するならば, 転換 (人口転換, 人口移動転換, 人口分布転換, 出生転換等々) の追究であったと言えるのではなかろうか.

そこで, 次に, 黒田の人口転換論について言及することにしたい.

3. 人口転換論

上述した人口学の学問的性格を踏まえて, 黒田は,「人口の諸分野におけるこのような秩序的変化を, 時には新しい次元とよんだが, 日本人口のこのような転換的事実に重大な関心を持ち続けてきた. ここでの転換は, 単に出生力の転換のみならず, 人口の他の領域におけるそれをもふくんでいる. 連続か転換かを区別することは容易ではない. それは, 連続過程なしに転換は発生しないことと, 誰でもが承認せざるをえないような転換が完了するまでには時間がかかるからである. しかし, 連続性で甘んじることは許されない. 秩序的変化をできるだけ早く触知する努力が必要である. 筆者は, 日本人口は構造的転換過程にはいっているとの観点に立って, 時に人口移動, 人口分布, 出生力, 人口構造の諸分野における転換期の構造分析を行なった」(黒田1979：p.15) と述べている.

これは, 逸速く転換を捉え, その変化に対応した施策を策定することが「人間福祉の増大」や「人間の尊厳」に寄与することになるし, また, こうした研究の営みが「人口学すること」の意味 (人口学の効用) であると考えた.

黒田によれば「社会や経済に秩序があるように, 人口現象にも秩序がある. そしてまた, 社会関係や経済活動の秩序に変化があるように, 人口現象にも変化が生ずる. 人口現象の 3 大要素である出生, 死亡, 移動は人口学的行動とよばれるが, それは人間の社会的・経済的・文化的行動と相互依存の不可分の関係にある. いわゆる人口転換論は, 経済的・社会的秩序の変化から人口動態現象の秩序の変化を説明しようとした仮説である」(黒田1979:p.13) とし,「事象の変化過程を一般化し, 一般理論を確立することは, 社会科学的研究の究極の目標であるかもしれない. しかし, 確立されたかにみえる一般理論が, 時と所にかかわりなく普遍的妥当性をもつことはありえない. 筆者の提起する課題は, 人口転換理論の一般理論的側面ではなく, 転換という概念である」(黒田1979：p.13) としてい

る.「転換は単純な量的変化だけを意味するものではなく,ある現象の量的変化と共に秩序としての変化の内容をもっていなければならない．秩序の変化とは何かを明確にすることは困難であるが，綿密な分析による価値判断によって秩序の変化を見出すことは不可能ではない」（黒田1979：pp.13-14）と転換について説明した後に，転換と連続性との関連について言及している.「転換に関連して注目されるのは，連続性の概念である．……しかし，筆者がここで問題にしているのは，……波及説としての連続性理論でもなければ，農村・都市の連続帯的理解でもなく，それはこのような連続概念にほぼ対立する転換の概念である」（黒田1979：p.14）とし，「過去の長い歴史の中での変化を詳細に分析していくことによって，人口転換理論のように，現象の秩序としての変化，すなわち転換を区別することはそれほど困難ではない．しかし，経過中の現在をふくめての短い歴史の中で，このような転換を明確にすることは容易ではないが，それを早期にあきらかにすることは現実科学としての人口学や社会科学の本来の任務であると思われる」（黒田1979：pp.14-15）としている．これは，黒田の人口学観，社会科学観，学問観を披瀝しているものであり，「現実科学としての人口学」という学問観が滲み出ていると言えよう．と同時に，これは，黒田人口学の中核をなす，いわば「社会・経済的人口転換論」の到達点とみることもできるのではなかろうか.

おわりに

黒田は，その後，統合的アプローチに基づいた新たなる人口転換論を提示することになる．それは，毎日新聞社が実施した「全国家族計画世論調査」を用いて分析した研究から紡ぎ出されたように思われる．その統合的アプローチとは「人口再生産行動や意識，あるいは子供に対する価値観の変化などに具現される社会変動過程に求めることである．人口政策の有無に関係なく，あるいは経済的発展段階の差異にかかわらず，人口再生産意識に変化が生ずることは社会変動の過程である．もちろん，そのような変化の生ずる具体的な過程は，国により時代により，異なっていることはいうまでもない．重要な点は，人々の意識転換なり，価値観の変化が生じたことになる．このような社会変動過程に人口転換の本質を求めることは，人口転換論の統合的理解への接近に役立つように思われる」（黒田1992：p.24）と述べている．これは，実態とともに文化・意識にも応分の比重をかけて現状分析を展開すべきであるとの主張であり，かつまた，このような分析方法に基づいて析出された人々の「思い」（喜びや悲しみ）も政策に組み込んだ学問体系（「社会・経済・文化的人口転換論」）の構築を目指したと考えられる.

しかし，この黒田の人口転換論は,「偉大なる未完成」に終わった．とすれば，私たちは，この黒田が残した遺産を継承し，発展させることが，今，求められている課題であると言えるのではなかろうか.

引用・参考文献

黒田俊夫（1960）『世界の人口 －構造と変動－』文雅堂書店.
黒田俊夫（1976）「昭和50年代における人口学の課題」『人口問題研究所年報』第20号，厚生省人口問題研究所.
黒田俊夫（1978）『日本人の寿命　世界最長寿国の光と影』日本経済新聞社.
黒田俊夫（1979）『日本人口の転換構造〔増補〕』古今書院.
黒田俊夫（1992）「日本の人口転換」『記録　日本人口少産化への軌跡　毎日新聞社家族計画世論調査・21回全資料』毎日新聞社.
清水浩昭（2005）「黒田俊夫論 －人口移動研究を中心にして－」『社会学論叢』第152号，日本大学社会学会，pp.55-73.
清水浩昭（2007）「時代に挑んだ人口学者 －黒田俊夫先生が遺したもの－」『人口と開発』第97号，アジア人口・開発協会，pp.37-40.

（付記）小稿は，清水浩昭編・解説（2009）『黒田俊夫著作選集　人口と社会』クレス出版所収の「解説・主要研究業績」からの抜粋を中核にしながら，若干の加筆・修正を行ったものである.